

圧迫面接より厳しい教育

経済学部長 田中 敦

就活が一段落して、4年のゼミ生と飲み会を開いたときの事です。就活の様子を、彼らに聞いてみました。

「就活で、圧迫面接ってあった？」

「もちろん、いっぱいありました。」

「大丈夫だった？」

「ゼミでの先生のツッコミに比べれば、大した事なかったです。」

「あら～（汗）」

ゼミ生の説明はこうでした。圧迫面接は意図的にやっているのだから、語調は怖くても内容に無理があり、「これくらいなら論破できるな」と内心思うことが多かったそうです。一方、ゼミ発表についての私のコメントは研究内容の本質を突くものが多く、その場での語調は優しくても、後からじわっと効いてきて怖いそうです。

私がいつも本質を突くコメントを言っているかどうかは別として、この話を聞いて「すばらしい!」と思いました。というのは、彼らは人の話を冷静に聞いて論理的に考える力を身につけて、就活などの実践で活用できていることになるからです。

経済学部生には、もちろん経済と経済学を学んで欲しいと思いますが、それと同時に物事を冷静にみて論理的に考える力も是非修得して欲しいと思っています。論理がどういふものかは、大学生であれば誰でも知っていると思います。でも、知っていることと使えることは全く別です。とくに2、3行の短い話ではなく、数ページ以上にわたる論文・レポートや数十分の発表となると、全体の流れで筋が通っていないことがあります。

たとえば、学生が今の銀行の問題点から今後の経営戦略を論じる研究をしていたとしましょう。その学生はまず問題点について一生懸命調べ、つぎに経営戦略について一生懸命調べます。ところが、それぞれを調べているときに、この研究の全体の筋を考えていない。すると、本来は問題点を解決するような経営戦略を考えなくてはいけないのに、指摘した問題点と考えた経営戦略との間にあまり関連性がないということになってしまいがちです。その学生も私が指摘すれば分かって

もらえるのですが、指摘されないと気づかないことが多々あります。

このように論理的にちゃんとした議論を展開することに加えて、経済学部生であれば経済学の理屈を使って論理的に考える

ことも重要です。たとえば、経済理論では直感的なものと違う結論が導き出されることがあります。有名なのは、「国民皆が貯蓄を増やそうとしても増やすことができない」という合成の誤謬でしょう。他にも、破綻した企業を救うと事態が悪化することがあるとか、人々が合理的に行動するとバブルのように間違った結果が出るということがあります。

理論だけでなく、データに基づいた議論も大切です。たとえば、日本は貿易立国であると言われているのに貿易依存度と呼ばれる数値は高くありません。異次元緩和で経済におカネがジャブジャブ出回っていると言われますが、実際に出回っているおカネは年3%ぐらいしか増えていません（マネーストックM3、2013年4月～15年12月）。日本にとって貿易や異次元緩和が重要ではないと言いたいのではなく、これらのことを議論するためにはもっと深く知らなければいけないということです。さらに、数値の大小を比較するときは統計的な検討が必要ですし、数値は平均だけでなく分散も大切な場合が多くあります。

経済学部では、このように論理的に考えることや経済学を使って考えることを、日々の優しくも厳しい教育を通して学んでいただいています。『エコノフォーラム21』はそういった学びの記録であり、そういった学生皆さんに読んでもらいたい記事も学生や教職員が書いています。発行にご尽力いただいた方々に感謝するとともに、多くの皆さんに楽しんで読んでいただけることを願っております。

